

【研修報告】

発達勉強会：子どもにかかわる支援者に求められること

日 時:令和5年2月25日(土)

<障害とは>

- ・社会の中での「生きにくさ」→社会のあり方によって、生きにくさは変化する(本人の責任ではない)
- ・必ず一人ひとりの内面に個性的で豊かな感性が存在する

<支援者の役割>

- ・「利用者一人ひとりが自分自身の存在に対して自信を持つこと」を支える
支援者も、社会の生きにくさの変容に関わる一部であることを自覚しながら支えていく必要がある

<支援者の自己理解>

- ・他者との関係の中で、他者に対してどのような影響を与えているか、自分自身について気づきを得ること
- ・支援する過程で、自分自身の価値観や感情が直接他者に影響を与えることを自覚する
例) 支援者:「10分間座れた」、利用者:「10分間座らされた」
→支援者が設定したねらいに、利用者を押し付ける設定になっていないか?
- ・相手を思いやり、相手の立場に立って考える想像力を身につける
(利用者の困りに対して必要な情報は何か?)

<支援者の態度>

- ・本人の困りを丁寧に聞き取り、必要な情報をさりげなく「ちょっとだけアドバイス」する
- ・枠組みを作らずちょっとしたヒントやきっかけを呈示して、本人が試行錯誤して成功へ導く
- ・本人にとって「1番心地の良いタイミング」を待ち関わる

<本人の立場に立った理解と援助>

- ・こだわりや自傷、コミュニケーションの問題などを「自閉症の症状・特徴の一つ」と捉えて済ませると、本人の意思や気持ちが見えなくなり人と人との気持ちの触れ合いがおろそかになる
- ・行動の背景にある本当の意思や気持ちに敏感であるべき

<子どもとの信頼関係を築く>

- ・支援者は、何よりもまず子どもに好かれ、必要とされる存在になることが求められる
- ・子どものありのままを受け入れ、本人の気持ちに対する感受性、理解しようとする態度が必要

<指導・訓練ではなく、理解と支援が大切>

- ・「指導しなければ」という思いで見ていると、指導者側は期待する課題が出来るか、指示に従えるかどうか気にとられるため、子どもが不本意な気持ちを様々な形で表していても気付けない
- ・子どもを指導訓練の対象としてではなく、共に生きる者として捉え、その自己実現を支援する姿勢が大切

<「見る一見られる」関係の中で、子どもから見られている自分を知る>

- ・支援者は「この人のために一生懸命している」という気持ちが強いとその分余計に防衛的になりがち
- ・保護者を含めて、他の人の意見や指摘に耳を傾ける率直な姿勢が求められる